ISSN 1343-0947

一般社団法人 ဂျပန် - မြန်မာချစ်ကြည်ရေးအသင်း

日本ミャンマー友好協会報

第173号
令和6年2月発行
発行人：藤村建夫
編集人：新美鉄雄

一般社団法人 日本ミャンマー友好協会　E-mail●tzkosm@abelia.ocn.ne.jp　http://jmfa-main.com/
●本　部 〒160-0012 東京都新宿区南元町13-3-504　TEL.03-6380-0409
●広報部 〒243-0017 神奈川県厚木市栄町1-2-2-322　FAX.046-224-3011

シェッタゴンパゴダの庭園（撮影：岡　晃市）

収録内容

ミャンマー内戦の期待される和平出口への模索 …… 2
日本ミャンマー交流基金の設立 ……3
「坂口奨学金」授与者が決定 ……4
楽しかった盛りだくさんの日帰りバスツアー … 5
日本の文化と経験から学んで生きる人生… 6～7
来日するミャンマー介護人材を支援する … 7～8
ミャンマー・ヤンゴン・日本人学校での講演 ……8～10
「伊藤祐民（すけたみ）とオッタマ僧正との出会い」 …… 11～13
お釈迦さまの物語（第八講）…… 14～15
協賛企業…… 16
編集後記「ヤダナー」 …… 16

チーミンダインの食堂

本部HP▶

当協会はミャンマー関係で唯一外務省から認知されている一般社団法人です。

巻頭言

ミャンマー内戦の期待される和平出口への模索

一般社団法人 日本ミャンマー友好協会
副会長　髙松 重信

現状下のミャンマーは特に昨年10月末からの少数民族武装集団及びNUGとの戦闘が激化し、出口の見えない内戦状態となっており、国民は犠牲を強いられ生活は困窮し、国家は疲弊しています。そこで、同国・独立後の歴史を振り返り、この悲惨な状態から希望が持てる出口を模索したいと思います。以下、私見の模索に対して、諸兄姉に於かれては異論もあると思いますが、その点、何卒ご容赦を賜りますようにお願い致します。一般市民に犠牲を強いる内戦を止め、話し合いによる和平を目指すことが最も重要と考え筆をとります。

ミャンマー政体の歴史の流れ

（愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ：オットー・フォン・ビスマルク）

詳細説明を省略しますが、1948年1月4日独立以降、ミャンマー政体の流れを検証すると、その結論は次の通りです。即ち、独立の後、米国、中国、国民党軍（蒋介石）などの外国勢力が介在した悲惨な内戦をようやく自力（国軍）で解決しました。しかしその後の経済政策が失敗し、最貧国になり、自国勢力の内紛や内戦で幾多の尊い犠牲の上で、タンシュエ議長の軍政時代にようやく2008年の憲法が国民の投票により採択されました。この憲法には欠陥もありますが、連邦共和国の憲法に定義付けられた規律正しい複数政党民主主義制度を実践すると謳われています。

つまり基本的には民主主義を目指しています。この憲法に基づく選挙で誕生したテインセイン大統領が大々的に民主化へ舵を切り、その後の選挙でスーチー政権（NLD政権）が誕生しました。ところが、NLD政権が理想的なデモクラシーを余りにも急激に行おうとしたことなどで、2021年2月1日、反発した国軍がクーデター（政変）を起こし、軍政が敷かれています。しかし、民衆側のNUGも国軍もレベルの差はあっても双方は民主主義を目指しています。

従って、独立以後のミャンマー政体は紆余曲折しながらも、歴史的には民主化の方向へ流れています。

連邦国家として具備すべき要件（民主主義）

ミャンマーは135種族以上の多民族国家です（内ビルマ族60～70%）。連邦国家を目指すために1947年2月12日パンロン会議で少数民族に自治権を与える約束をしていました。これらの経緯からミャンマーは多民族の連邦国家として存在するためには「各民族への自由と国家の統制」が必要になります。この二つが合理的にバランスよく取れるのが自由民主主義です。従いまして、ミャンマーは本質的に民主国家へ進むことになると思っています。

選挙で誕生した新政権の政治活動の保証

ミャンマーは独立以来、連邦国家として、国軍と少数武装集団などとの戦闘が絶えません。現状下、仮にNUGや少数民族武装勢力が国軍を打倒しても、目的が異なる少数武装集団などとの戦闘は簡単には収まらないでしょう。従って、民主的な選挙で誕生した新政権の政治活動を保証するためには当面、国軍が必要になると思います。

ミャンマー流の民主主義

以上述べてきたことから判断すると、歴史の流れからも、また国軍及びNUG等のレベルの差はあっても、双方は何れも民主主義を目指しています。従いましてミャンマーに関して次の認識が大変重要と思います。

【ミャンマー国家の政体はいきなり完全な民主主義でなく、段階的な民主国家形成を目指し、可能な限り民主的な選挙で選ばれた新政権と国軍が共生し、取りあえずミャンマー流の民主国家を構築する】のが歴史の流れです。

この様に民主主義をラジカルに目指すのではなく、国軍とも共生しながら漸進的に民主国家を形成していくのが、ミャンマー流・民主主義達成のプロセスであると思います。その国には自国に適したやり方で目的を達成することが重要であると思います。

考えられる平和・発展の道筋

戦争は人類が最も忌避すべき凄惨な事件です。現状下のミャンマーは国軍とNUG及び少数民族武装勢力などとの内戦であります。双方に言い分があっても、人々に犠牲を強いている内戦を停戦し、和平をもたらすことが最も重要と思います。その後に以上の上述事項から判断して、さしずめ憲法に沿った民主的な選挙を行い、新政権を誕生させ、国軍と一定の共生を図る中で、先ずミャンマー流の民主主義国家（連邦共和国）を構築し、その後に理想を目指したミャンマー発展の中長期計画を策定し、それを実施するのが、現実的にミャンマーの国家と人々のために大変重要であると思う次第です。

日本ミャンマー交流基金の設立
― 日本とミャンマーの交流活動を促進するために ―

日本ミャンマー交流基金設立の目的

日本とミャンマーの持続的な友好と親善を促進するために、「文化交流」、「人材交流」、「経済交流」の3分野の活動を柱として、両国間の理解を深め、協力し合うことを目的とします。

「日本ミャンマー交流基金」の活動

2023年現在ミャンマー国内の政情が混乱しています。そのため、当面日本における活動が中心となっていますが、可能な範囲でミャンマー国内での活動も行っています。

1. 文化交流活動

日本とミャンマーの文化・歴史、教育等に関する情報の収集・発信、啓発・普及に努め、ミャンマーと日本の両国間の文化交流を推進します。

☆ミャンマー映画観賞会
☆家庭訪問による日緬文化交流会等
☆日本語スピーチコンテスト
☆舞踊・音楽等の文化交流

2. 人材交流活動

日本とミャンマー両国間で、学生、研修生、一般人、専門家、経済人、文化人等が自由に「相互人材交流」することを主眼とします。

☆日緬青年交流会（レクレーション等のイベント）
☆来日留学生や研修生との交流会
☆困窮しているミャンマー人留学生に対する奨学金授与

3. 経済交流活動

日本とミャンマーの企業間経済交流や、企業活動に不可欠な情報と人材の交流を支援します。

☆日本の企業で働くために日本語を学習している貧困青年に対する奨学金の授与
☆日緬ビジネスにかかる人材の円滑な仕事環境改善支援
☆ミャンマーの経済事情に関する経済セミナー

「日本ミャンマー交流基金」への募金の申請手順

1. 募金のお申込み

「日本ミャンマー交流基金」の募金のお申込みは、本協会の下記URLよりご申請をお願いいたします。

https://www.jmfa-main.com/foundation

振込先
銀行名：三菱UFJ銀行
新宿新都心支店
口座番号：（普通）0376654
名義人：日本ミャンマー友好協会
専務理事　都築　治

2. 本基金に関するお問い合わせ

連絡先：専務理事 都築治
TEL：080-9080-6001
E-mail：tzkosm@abelia.ocn.ne.jp

会費納入のお願い

当協会も新体制のもと、順調に運営を始めています。会費未納の方は下記新規口座に納入をお願いいたします。

<年会費> 個人　10,000円
学生　3,000円
法人　50,000円

<振込先>
三菱UFJ銀行 新宿新都心支店 普通0376654 日本ミャンマー友好協会　都築治

会員増強をいたしております。お知り合いにミャンマーに興味のある方ございましたらご勧誘ください。

「坂口奨学金」授与者が決定

経済交流部

当協会は、坂口喜一郎氏からの寄付金をもとに、日本で働くことを希望して、日本語を勉強しているミャンマー青年を資金的に支援すること目的として「坂口奨学金」制度を2023年度から開始しました。

当協会のミャンマー支部が中心となり、ヤンゴン市内で日本語教室を開講している以下の4つの日本語学校の協力を得て、各学校の校長先生から構成される選考委員会を設置しました。

◆Akiko Japanese Training Center
◆Kazumichi Japanese Language Center
◆M.K.K. Japanese Training Center
◆Nippon Japanese Language Center

応募資格として、以下の4項目を設定しました。特に貧しい家庭出身の青年の努力を優先的に支援することとしました。

- 4つの指定された日本語学校の日本語学習コースに登録して通学している
- JLPTのN3レベルに合格している
- 日本で働くことを希望し、受け入れ企業が予定されている
- 生活環境が厳しく、苦学している

7月の日本語能力試験の結果、N3レベル以上に合格した応募者を対象に以下の3項目の選考基準にもとづいて、最終選考を行いました。

- 日本の受け入れ企業が決定している人を優先する
- 家庭が貧困状態にある人を優先する
- 面接を行い、日本で働く意思と成果の可能性を確認する

全体では、応募者数53人の中から20人が選考されました。その内訳は以下のとおりです。N2レベルの応募者数は4人で、3名が合格、N3レベルでは49名が応募し、17名が合格しました。

応募者数	合格者数
N2：4	N2：3
N3：49	N3：17
計：53人	計：20人

奨学金は日本語教室の授業料とJLPT試験の受験料に相当する金額を奨学金として授与しました。

10月6日に、「奨学金授与式」が開催されました。最初に当協会ミャンマー支部長のDaw Nweni Zawが「坂口奨学金」の趣旨を述べ、合格者の皆さんが日本において、立派にそれぞれの希望と目的を達成されるようにと、祝辞を述べました。

続いて、選考委員会メンバーである各学校の校長先生からそれぞれ、合格した受講生に奨学金が授与されました。その後、奨学金を授与された生徒がそれぞれ、感謝と自分の日本での仕事や勉強についての希望と期待を述べて、終了しました。

ミャンマーでは、長引く政治的混乱に見切りをつけて、海外で働くことや勉強することを希望する若者が激増しています。

特に日本に行くことを希望する青年は顕著な増加をしており、今年の7月と12月に実施された「日本語能力試験」（JLPT）には、毎回、10万人が応募して受験したとのことです。

最近、日本に来ているミャンマー青年の多くが介護分野で働いています。日本の高齢化は顕著な勢いで進んでおり、高齢者人口は、総人口の28%にも達しており、2050年には40%にも達するとの予想がなされています。このような日本人の高齢化により、労働力の減少が大きな発展のネックになると想定されていますが、労働力の不足をカバーすると期待されているのが、外国人労働者です。

今後とも、外国人の来日は増えると予想されますが、その中で、ミャンマー出身の割合はかなり高くなることが予想されます。そうなると、日本社会にうまく適応できるかどうかが、問題になります。その時に、もっとも重要な要素がコミュニケーションの手段としての日本語能力です。

協会では、奨学金を得て来日するミャンマー青年に対して、経済交流事業、人材交流事業、文化交流事業への参加を促し、いろいろな方法手段により、協会会員との交流を図ると共に、快適な日本での生活が可能となるよう支援していきたいと希望しています。

Daw Nweni Zawの開会挨拶

奨学金を授与された受講生

秋の日緬青年交流会
楽しかった盛りだくさんの日帰りバスツアー

人材交流部

晩秋の11月26日(日)、日本とミャンマーの青年と筆者、計14名が参加して、**『房総W紅葉狩り&東京ドイツ村ウインターイルミネーション、「海鮮浜焼き」と「赤海老のお刺身」食べ放題&南房総みかん狩り』**という盛りだくさんの日緬青年交流会を楽しみました。

バスに乗る時から、日本とミャンマーの青年が交流できるように座席を交互に組み合わせて座りました。

とみうらマート

最初に「とみうらマート」という市場で「卵のつかみ取り」をしました。自分の手でプラスチックの卵を掴んだ数だけ実物の卵と交換されるもの。最高は6個を掴んだ人もあり、普通は4個でした。

海鮮浜焼きと赤海老の食べ放題

お昼前に浜焼き市場に到着。そこで用意された新鮮な海鮮（ハマグリ、カキ、ホタテ、イカ、サザエ、魚等）を網に乗せて焼いて食べ放題。この他に、マグロや赤海老の海鮮丼も食べ放題。最後に果物とケーキ類も食べ放題。皆、満腹、満腹でした。

みかん狩り

食後に近くの農家の畑で「みかん狩り」をしました。枝もたわわになっているみかんをちぎっては食べ、ちぎっては食べ。残念ながら、ランチで満腹のため、せいぜい5～6個食べるとすぐに満腹！このためおみやげにみかんを買う人が多かったです。

小松寺で紅葉狩り

みかんを食べてしばらくすると小松寺に着きました。湾曲した小道を5分歩いて行くと、道の両側に素晴らしい紅葉がありました。紅葉は正に今が見頃でしばし見惚れました。

濃講の滝で散策

バスに戻ってしばらく行くと、濃講の滝に着きました。この滝は、近辺の農家の田畑に水を入れるために山の一部にトンネルを掘ったところ、小さな滝ができたという人工の滝でした。この滝の水が注ぐ川に沿って板張りの歩道が作られており、散策できるようになっていました。この歩道の両側も紅葉の木々が一杯でした。

東京ドイツ村のイルミネーション

東京ドイツ村には、午後5時ごろに到着。辺りはすでに真っ暗。ドイツ村のイルミネーションが眩いばかりに輝いていました。ここで、参加者は個別グループに分かれて園内をそぞろ歩きながら、ドイツ風のお城や建物、童話に出てくる動物や子供など、多彩な色が組み合わされたイルミネーションを大いに楽しみました。

参加者は、全員、この盛りだくさんなバスの日帰りツアーを楽しむことができたと、喜んでいました。いくつかを紹介します。

- I am profoundly impressed by the warm reception and the readiness of everyone to extend assistance throughout the duration of the trip. It was an indelible and cherished experience in my sojourn in Japan. Hope to have more opportunities to engage in similar programs.
- 普段関わる機会がなかなか作れない、ミャンマー出身の方と接点を持つことができ、非常に良い機会となりました。

今回の日帰りバスツアーも、とても好評でした。次回は2024年4月に開催します。（藤村記）

＜活躍する在日ミャンマー人のご紹介＞ NO.2

日本の文化と経験から学んで生きる人生

筆者：PYAE SONE AUNG（株式会社サンオー 製造部）

自己紹介

私の名前はピェゾンアウン（PYAE SONE AUNG）です。年齢は30歳です。日本に来て6年になります。私の生まれ故郷はヤンゴンのカヤンです。2017年にタンリン工科大学（Thanlyin Technological University）で電力工学の学士号を取得しました。

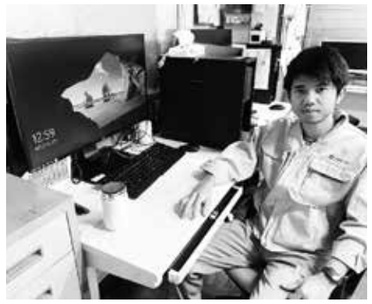
卒業後は、Auto CADや建築サービス（M&Eシステム）などのエンジニアリングコースを学びました。その時、家族から日本語を勉強するようにアドバイスされ、日本に行ってほしいと言われました。それで、留学ビザで日本に来ました。2018年4月から2020年3月までの2年間、早稲田外語専門学校の日本語プログラムの学生でした。

卒業後の就職活動

語学学校を卒業した後、コロナ禍で母国に帰るか、日本に住み続けるかの選択を迫られました。なぜなら、次のビザが次の挑戦だったからです。卒業後、いくつかの会社の募集に応募しました。それから2ヶ月近くが経ちました。海外での仕事や生活は、人々が考えているような簡単なものではありません。機会の先には、トレードオフと犠牲があります。病気の時は、寂しい思いをしました。それで、内定が来なかったらミャンマーに帰ろうと決めました。幸いなことに、2020年9月に現在の株式会社サンオーに就職することができました。

現在の仕事内容

私のポジションはCADオペレーターです。しかし、それは私の大学院の学位とは全く違いました。そのため、オフィスの言語の使用など、多くの課題に直面しました。会社では、新卒者向けのインターンシップ制度を設けており、就職活動の利便性を確保しています。オフィスでCADオペレーターとして働いていましたが、社長と一緒に工場に行って現場調査をすることもありました。私の社長は協力的で、私が熟練した人間になるように後押しし、また、社長の経験を私と共有するのに十分寛大です。社長から日本の問題解決システム（報連相）を教えられました。報連相システムとは、報（報告）、連（連絡）、相（相談）です。1年後、工場のサイレンサー製造部門に異動し、現在に至ります。私は最善を尽くし、ここにいるチャンスがある限り、自分自身を高めることをやめません。



日本の文化と経験

日本の文化は私をより良い人間にしてくれました。日本で得た経験の一つ一つが、今のように自分を成長させてくれるので、本当に感謝しています。

私のモットーは時間厳守です。以前はいつも遅刻していました。日本では、早くしないとすぐに遅刻してしまいます。私は時間を守ることに価値を見出しました。

1. 生活費と貯蓄のヒント：住居費、食費、交通費、健康保険、税金、その他の一般的な費用など。自炊したほうが出費が抑えられます。貯金はできる時だけ貯金できます。
2. ワークライフバランス：この両者のバランスがこれまで以上に重要になっていることを理解しています。

最後に、私の考え方を変えて、人としての私を変えた七つの日本観を共有したいと思います。

【①生きがい】
あなたの生きる目的は何ですか?「存在理由」または「人生の目的」。

【②仕方ない】
コントロールできるものをコントロールする

【③わびさび】
不完全、儚いものに美を見出す

【④ガマン】
強くあり続け、反応をコントロールする（困難な状況でも強く、あきらめない）

【⑤カイゼン】
継続的な改善。（長期的な進歩と成長を実現するため）

【⑥守破離】
学習と習熟について、まず、最初に専門の知識とスキルの基礎を学び、それができたら次に新らしい方法をやってみて、最後に自分の流儀やスタイルを開発する。

【⑦物の憐れ】
喜び、悲しみ、美しさ、衰退に見られるしみじみとした情趣で、無常観と儚さの感情をいう。それは、今この瞬間を大切にし、その美しさを認め、今ある時間に感謝することです。

＜活躍する在日ミャンマー人のご紹介＞ NO.3

来日するミャンマー介護人材を支援する

筆者：Shwe La Min（外国人受け入れ支援企業勤務）

自己紹介

私の名前はシュエラミンです。ヤンゴン生まれの27歳です。2023年4月に日本に来ました。来日後、3か月は千葉市に滞在して、東京本社での実務を経験し、7月からは福岡市に住んで勤務をしています。現在の仕事は、日本で就業するミャンマーの介護人材を支援することです。来日する前は、特定技能試験に関わる日本語、専門分野などを無償で教育機会を提供する前述の企業のミャンマーにある自社運営の教育拠点の教務セクションで正職員の教師として働いていました。

主に、カリキュラムの作成や学生の授業評価をはじめ、試験結果などをモニタリングし、改善策を考えたり、学生と定期面談を行い、在学期間内に試験に合格できるように、また、日本で5年間就業できるよう、人材を育成することでした。また、上記に加え、日本での就業後にできるだけカルチャーショックを少なくして生活できるように、日本語の他にも文化やマナーなどを指導していました。

介護人材が日本で長く働けるように支援する

私の仕事の目標は、介護人材として従事する青年達が、日本で安心して、出来るだけ長く働けるように支援することです。そのためには、生活上の制約となる原因などを取り除くと共に、仕事がスムーズにいくように、勤務先と被介護者とのコミュニケーションなどが円滑にできるように助言をしています。

具体的な事例を示したいと思います。

(1)来日した介護人材が直面している事柄

●「入職者の日本語能力が十分ではないから、仕事に差し支えるので帰国させたいと考えている」という受け入れ事業所からの声を聞きました。入職者の日本語レベルは、十分ではなかったので、仕事を円滑に行うことに支障が出ていました。

●日本は、賑やかで人が多いという印象を持っていた青年が就労した事業所は、予想と異なる環境（田舎）であったため、1年間ぐらい経つと転職したいという人が増えていました。その理由としては、外国人にとっては、家賃が思うほど安くないことに加えて、日本語能力試験の受験の際に、受験料より交通費が多くかかっています。効率的に考えてから受験するので、都会に比べると受験する人数がわずかな状況です。

●田舎のような環境だからこそ、人の温かさや物価の安さがあり、貯金

に効果的という人もいます。また、都会で生活する人は日本語能力の上達が早く、視野が広がりやすい傾向ですが、都会の雰囲気に馴染み過ぎて貯金できない人が多いのも事実です。

(2)入職後の課題

●労働需要が高まってくるとともに外国人労働者の受け入れも著しく増加しましたが、現場での被介護者との関係について、困っている人もいます。ある入職者から「食事介助の時、介助させてもらえなかったり、騒いでいたりする被介護者がいて困った」という声もありました。

●ある時、仕事中に笑顔でいたら、「何かあったのとか、ちゃんと仕事をやりなさい」と言われたそうです。また、最近、ある人は「店長さんから指導された時、泣きたくなったため、表情をコントロールしていたのですが、笑顔のようになってしまい、誤解されてしまい、泣き出した」ということです。日本人は、海外とは異なり、現場で表情を出さないでいることが、真面目に働いていると考えるという違いがあるようです。

支援の仕事のやりがいとは

特定技能1号には、彼らの仕事や生活の悩みを相談できるようにすることは、登録支援機関による支援義務であると、法律に定められています。具体的な支援業務として、入国する際の送迎、入居の対応、行政手続きに加え、定期的に事業所への訪問や面談を設けるのが、基本的なこととされています。日本は法治国家ですが、外国人を狙っている詐欺など、多く発生していますので、来日する人材は十分保護される必要があります。前項の事例で示した「日本語能力が十分ではないから、仕事に差し支えるので帰国させたいと考えている」と言われた青年は、入国してまだ日も浅く、自分としては、なんとかとりなして、滞在できるように努めましたが、精神的には、大変でした。しかし、幸いなことに、青年は帰国せず、解決の道が見つかりました。現在、その青年は、日本語もずいぶん上達し、仕事の面も成長して、職場で高い評価を得るようになり、大変嬉しく思っています。

この事例でもわかるように、入国したばかりの青年の不安や悩みを一つでも少なくなるよう努め、日本で長く働けるようにサポートしていくことが、支援の基本であると思います。その支援が上手くいき、多くのミャンマーの青年達が安心して働けるようになった時こそ、支援の仕事をする私たちがやりがいを感じる時なのです。

ミャンマー・ヤンゴン・日本人学校での講演

2023年7月21日
髙松 重信
(一社)日本ミャンマー友好協会（副会長）

海外で2番目に設立された伝統のあるミャンマー・ヤンゴン・日本人学校からの御依頼により2023年7月4日、同校にお伺いし鉄道などに関する講演を致しましたので、その概要を下記にお知らせいたします。

1. ヤンゴン日本人学校学校概要

【学校名】
日本語名：在ミャンマー日本国大使館附属ヤンゴン日本人学校
英字表記：YANGON JAPANESE SCHOOL Embassy of Japan（Annex）
【所在地】
No.1 Thantaman Rd., Dagon T/S, Yangon
【設立年月日】
1964年（昭和39年）6月3日（バンコクに次ぎ、世界で2番目の歴史を持つ日本人学校です）
【学校長】鹿島順
【学級数】10クラス（幼稚部1、小学部6、中学部3）
【教　室】
普通教室15、幼稚部教室1
特別教室：理科室、音楽室、図工・美術室、家庭科室、学習室、図書室
【その他施設】グラウンド、体育館、アッセンブリホール、放送室、体育倉庫

2. 山岡望海先生による学校紹介

ヤンゴン日本人学校は、昭和39年6月に開校した世界で2番目に歴史のある日本人学校です。コロナ禍の2年間はオンライン授業を続け、令和4年の春に対面での授業を再開しました。

その間、生徒数は一時期の10分の1までに激減しましたが、当地の日本人社会をはじめ多くの方々に支えられて今日に至ります。本校は現地理解教育や日本企業と連携した社会科見学、職業講話などを実施し、次代を担うグローバル人材の育成を目指しています。ヤンゴン日本人学校の子どもたちは、ミャンマーの豊かな自然、優しい人々と触れ合いながら、元気に学校生活を送っています。

ヤンゴン日本人学校学校の全景

3. 講演内容

2023年7月4日に訪問し先ず初めに、鹿島校長先生から同校の歴史や近況をお聞かせ頂いたり、日本とミャンマーとは17世紀から血の繋がりがあり、ミャンマーの独立には、その祖となったオッタマ僧正及びアウンサン率いる独立の志士30名と共に日本の若者と共に立ち上がり、その母体になったこと、戦後もこのような関係から我が国は特に、ミャンマーに支援と共生を鋭意“進めている”などを校長先生と相互に御話いたしました。

この様な両国の歴史と伝統の中で設立されたヤンゴン日本人学校殿からは有意の人材が数多く巣立っていかれたと御聞きしていましたので、今回、私はこの伝統の基、生徒の皆さん方が今後、夢と希望を持たれ世界に羽ばたく人になって頂きたく思い次項に力点を置きお話させて頂きました。

日本とミャンマーとの深い歴史的な絆、鉄道が社会や環境に果たしている役割、そのために鉄道が最も重要視しなければならない安全第一の原理、現状下にミャンマーの人々に明るい希望を持たせるのであろうミャンマー鉄道と近代化などにつき、途中休憩を含み中学生部の14名の生徒さんへ約2時間の講演をさせて頂きました。

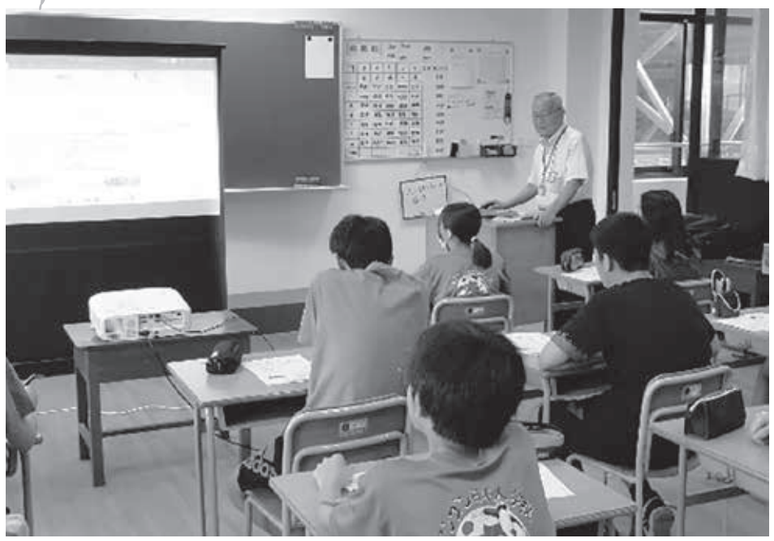
生徒の皆様は、午後の貴重は勉学時間を割いてお話をお聞き下され、御質問もして頂きました。この講演の内容に対する印象、理解及び評価は生徒の皆様方の感想文から紹介させて頂きます。

4. 生徒の皆様方の感想（一部分）

「今日は鉄道とミャンマーとの絆をより詳しく説明していただいてありがとうございました。鉄道を通して、日本とミャンマーは絆を深めていったんだなと感じました。」

「私は13年間ずっとミャンマーに住んでいて、鉄道があまり身近な存在ではなかったのですが、今回興味深いお話を聞いて鉄道について考えるいい機会になったと思います。車輪の形や角度など普段は知れないお話を聞けて、とても楽しかったです。安全を考慮した構造についても、思っていたよりも複雑であることが分かり感心しました。また日本とミャンマーが昔から深く関わり合っていたこと・・・」

「今日は日本とミャンマーとの絆の歴史やミャンマーの鉄道についてお



講演の一コマ

話・・・両方のお話は、私にはまだ難しい内容で、時々「え…何を言っているんだろう…」と分からなくなることが沢山ありましたが、聞いていて面白かったです。その両方のお話の中から、私が「すごいな～」と感じたところは、安全運行システムのATCやCTCといった装置のことや、鉄道は他の輸送機関に比べ、省エネルギーでCO_2の排出が少なく環境にやさしい交通機関だという事、鉄道では、交通事故死傷者数が少なく安全性の高い乗り物だということなど、初めて聞いた話ばかりだったので、「すごいな～」と思えたお話が沢山ありました。いつかもう一度ミャンマーの鉄道に乗りたいです。

◆質問

なぜミャンマーの電車にはドアがないのですか?（注：後刻、この生徒さんには先生を介しお答えしました）

「今日は、お忙しい中僕たちに電車の話をしていただき、ありがとうございました。粘着式鉄道のことや、どうやって曲がるのかなどのことがよく分かりました。鉄道には安全性が大切ということもよく分かりました。ウ・オッタマさんのことを聞いてすごい人だということが分かりました。日本の列車がミャンマーで動いていることが分かりました。特にどうして脱線しないのかなどの話はなるほどと思いました。」

「今日の授業とても興味深くて、勉強になりました。特に鉄道の原理や役割のところが印象に残りました。そして日本とミャンマーの古くからの絆を知ることができてとてもよかったです。普段知れないことを知ることができるいい機会になりました。思わず誰かに自慢したくなるようなことを教えて下さりありがとうございました。」

「・・・特に（鉄道は）環境にやさしいということに驚きました。なぜなら大きい乗り物と言ったらあまり環境によくないいうイメージがあったからです。新しい知識が増えました。・・・日本とミャンマーは昔から関係していると聞き、ミャンマーにすごく親近感がわきました。そして、ミャンマーの鉄道にも日本が協力したり、昔からレベルの高い鉄道をつくれていた日本のすごさを改めて感じました。アウンサン将軍については調べたことがあり、ちょっとしたことは少し知っていたけれど、お話を聞きもっと深く知ることができました。」

「ミャンマーの鉄道と日本とミャンマーのつながりについてのお話では、日本人がミャンマーに貢献していたことを知って、同じ日本人として嬉しくなった。私はミャンマーに来て、ミャンマーが抱える問題を知って、どうすればミャンマーがより良くなるのか考えることがあったが、今回のお話で『ミャンマーへの鉄道支援』は様々な方面からミャンマーをサポートできると知った。特に地域差の解消・文化に対する影響は興味深かった。お話ありがとうございました。」

5. 結び

我が国にとっては誠に深い絆を持ち今後も重要な国家であるこのミャンマーに於いて、今後も日本の子弟殿が多く勉学されることは間違いのない事実であると思います。

私は、同校が今後益々ご発展されることを願っております。

現状下のこの紛争の中で、一生懸命に生徒の皆様方に渾身の教育をされている先生方々及び関係各位殿の御苦労に日本人の一人として心中からご苦労様と感謝を申し上げます。

また今回、私の拙講演に対して、貴重な時間を与えて頂き、また種々準備して頂いた鹿島校長先生、山岡先生及び同校の関係各位殿に厚く御礼申し上げます。

「伊藤祐民（すけたみ）とオッタマ僧正との出会い」～ ミャンマー留学生育成110年記念 ～

当協会理事　田中 進

日　時：2023年11月11日(土)
　　17：00～18：30
会　場：揚輝荘　聴松閣
　　地階多目的ホール
講　師：NPO法人揚輝荘の会
　　田中 進　江添洋一

＜講演会＞

司会　鈴木マティリ　田中進

大正2年（1913）、伊藤祐民はオッタマ僧正との約束でビルマ（ミャンマー）から男子4人、女子2人の日本へ初めての留学生を温かく迎えました。その後、彼らを育成しビルマへ帰国させました。本年はそれから110年の記念の年になります。祐民とビルマ独立の立役者オッタマ僧正との出会いと歴史を振り返りました。セレモニーは東京、神奈川、大阪、京都から48名の日本とミャンマーの皆様が参加し、NPO揚輝荘の会 都島理事長の開会の辞から始まり、続いて日本在住30年の新美タンタンウインさん（光エンタープライズ代表）、留学生のメイナディさん（京大大学院生）、サバイプーさん（名大大学院生）、ラエマウン氏（アラカン州出身）、新美鉄雄氏（一社日本ミャンマー友好協会理事）の皆様からスピーチを頂きました。

＜伊藤祐民と
オッタマ僧正との出会い＞

明治43年（1910）3月、名古屋一の豪商いとう呉服店の社長伊藤祐民が栄町にデパートメントストアを開店させた開店日です。店内に見慣れない僧服で色黒の男を見かけ貴賓室に招き入れました。彼はビルマ僧で京都西本願寺の大谷光瑞の勧めもあり明治37年（1904）渡日し、龍谷大学で英語、仏語、サンスクリット語を教え経済的に支えとなりました。

伊藤家が代々仏教篤信の家風から、これも何かの因縁と貴賓室に招じて面会したところビルマのオッタマという僧侶で、語り合い互に知己のような親しさを感じ数日を伊藤家で過ごしてしまった。その後もオッタマ師は来日する毎に伊藤家、揚輝荘を根城にして東奔西走しました。

1910年開店日の貴賓室で祐民とオッタマ

＜祐民とオッタマとの約束＞

ビルマを支配しているイギリスは科学教育を好まず、むしろ恐れて旧体以前たる教育をし、学校では理化学、数学などの化学系統の学問を一切教える事を禁じています。いつまでも近代国家として先進国に伍していくことは出来ません。ビルマの学生を外国に留学させたいのです。オッタマはこの様に語りました。それに対して祐民はそれなら日本に送って教育させたらよいでしょう。日本の最近の科学知識は非常に発達してよい先生もたくさんいます。私は商人で政治家でも軍人でもありません。政治や軍人向きのことは援助できませんが、自宅に青少年をあずかって日本の学校に通わせるくらいは出来ます。

この3年後大正2年（1913）5月神戸の大阪商船神戸支店から名古屋の伊藤家に一本の電話が入りました。「今到着した欧州航路の船で、ラングーンから6人の青少年がオッタマの親書を以って『ナゴヤイトウサン』とだけ繰り返しています。引き取りに来てほしい。引き取れない場合は折り返しビルマに帰してほしいとのことだが、どうしますか」もちろん祐民はすぐさま使いを神戸に走らせました。

伊藤家本宅で祐民の子供とオッタマと留学生

左から　マインゾ、マソ、チャントン、日本人、ラモン、セイエン、ソーテン、ビルマ園

伊藤家では手狭のため老松町にビルマ園を建て、6名の青少年を教育しました。

＜オッタマ僧正の履歴と反英運動＞

- 1879年12月29日アラカン州のアキャブ（シットウェイ）で生誕。
- 1895年17歳：カルカッタの大学に行きインド哲学を学び、1900年イギリス、フランスにて政治法律経済を5年間研究。
- 1904年26歳：京都西本願寺の大谷光瑞の勧めもあり渡日し、龍谷大学で英語、仏語、サンスクリット語を教え経済的に支えとなる。
- 1910年32歳：名古屋で伊藤祐民と運命の出会い交友関係になる。
- 1913年35歳：オッタマの妹マインゾ、ソーセン、セーエン6名の留学生を伊藤祐民に預ける。
- 1914年36歳：日本から米国に渡り6か月再度日本に引き返し次いで南洋諸国を廻る。帰国するもこの年第一次世界大戦が始まり、反英運動を怖れラングーン市内に6年間軟禁。
- 1921年43歳：英官憲の忌諱に触れ1年間の禁固刑で入獄。
- 1924年46歳：反英運動の為再度ラングーン中央監獄に3年間入獄される。

左1年間マービン監獄、右　3年間ラングーン中央監獄　入獄される

- 1927年49歳：出獄後民衆の賛をえて印緬分離円卓会議を唱え全国を廻る。
- 1928年50歳：第3次渡日、次いで支那（中国）に行き清朝を倒した中國国民党の革命現状を見聞。
- 1929年51歳：支那から日本に滞在、更に6月南京で行われた孫文の国葬に印度民衆の代表として参列、10月日本を離れ帰国。
- 1930年52歳：タラワジ暴動の指導者と見なされインドに追放される。
- 1935年57歳：印度ヒンズー マハーサバーの会長となる。
- 1938年60歳：支那と日本を著す。（1937年日支事変に関する正確な資料、蒋介石の迷夢、ビルマルートの正しき認識）
- 1939年9月9日：シュエダゴンパコダの東僧房で病死　享年61歳

1929年中国国民党とウオッタマ僧正

＜祐民とオッタマ・留学生の映像上映＞

（撮影1934年　長谷川傳次郎）

祐民はマインゾとヤンゴンでソーセン、マソ、セーエン達とはイエナンジャンで20年振りに再会し、ビルマから追放されていたオッタマ僧正とはインドで再会しました。

彼の案内で佛陀が最初の説法をしたサルナート、仏陀入滅の地クシーナガル、最後に仏陀の故郷ルンビニ迄一緒でした。この出会いが最後となりオッタマは5年後の1939年に祐民は1940年ともに亡くなりました。

ルンビニ、アショカ王の石柱

インドカルカッタで再会の祐民とオッタマ僧正

アメリカテキサス州のセーエン氏孫夫妻

2023年11月11日セレモニー会場風景

伊藤祐民曾孫伊藤卓雄氏のご挨拶と右司会田中進

＜ミャンマー留学生育成110年＞

10年前の100年記念セレモニーに参加された元留学生セーエさんの孫キンインニンニョさんの挨拶文を紹介しました。

「あなたの手紙は、私たちがあなたのことを懐かしんで話していた時期と重なっていました。そして110周年セレモニーのご挨拶をいただき大変嬉しく思います。

私たち二人は現在、国の内戦のため、2021年11月からほぼ2年間、米国テキサス州オースティンに足止めされています。もし私たちがミャンマーにいるなら、あなたの110周年記念に行っていたでしょう。しかし、私たちの国が良い状態に戻ると仮定して、将来、連絡を取り、皆さんにお会いできるよう努めます。2013年に名古屋を訪問して100周年を迎えたときのことを思い出させます。

私たちは、あなた方の親切と偉大な国について一生忘れられない思い出を抱いています。」

セレモニーの最後に伊藤祐民氏の曾孫に当たる伊藤卓雄氏から挨拶を頂き、その後にお茶お菓子の懇親を行い午後7時に終了しました。

中日新聞　2013年（平成25年）11月12日（火曜日）　市 愛知　20

松坂屋の初代社長　ビルマ留学生受け入れ100年記念

子孫が感激の対面

百貨店「松坂屋」の初代社長、伊藤次郎左衛門祐民（一八七八―一九四〇年）が、ビルマ（ミャンマー）から留学生を受け入れて百年を迎えたことを記念した交流会が九日、千種区法王町二の揚輝荘・聴秋園であり、祐民と留学生の子孫同士が対面を果たした。（北村剛史）

千種の揚輝荘

祐民は一九一三（大正二）年にビルマから留学生六人を受け入れた。名古屋で日本語教育などを受けた六人は最長六年間、日本に滞在したとされる。

交流会には六人の一人、セイエンさんの孫娘キンニンジンニョさんが、ヤンゴンから夫とともに参加。伊藤家からは祐民のひ孫にあたる十八代当主若也さん（四七）＝東京都目黒区＝と、その弟卓雄さん（四三）＝千種区＝が出席した。

伊藤家の二人と記念品などを交換したキンニンジンニョさんは、「小さいころ寝る前に、祖父から留学先の名古屋の話を聞いていた。ここで伊藤家の人たちと会えるとは夢のようだ」と感激した様子。「日本語を勉強して、次は直接話がしたい」と述べた。

一方、哲也さんは「曾祖父がどんなことをしたのか、はっきり知らなかった。このような機会をもうけてもらいありがたい」。卓雄さんは「今回をきっかけに、交流を深めたい」と語った。

交流会は、祐民の足跡を調査研究しているNPO法人揚輝荘の会が開き、ミャンマー人留学生ら四十五人が参加した。

「夢のよう」「交流深めたい」

キンニンジンニョさん夫と記念品を交換する伊藤哲也さん＝千種区で

2013年11月9日(土)　100年記念セレモニー

＜特別寄稿＞

お釈迦さまの物語（第八講）

講師：つづきおさむ

17　火の神に仕える カッサパ（Kassapha）三兄弟

高い身分の三十人の若者を教化したあと、ウルヴェーラーに向ってブッダは歩みを進めました。ウルヴェーラー地方には、髪をほら貝結びにしている著名な三人のバラモンがいました。ウルヴェーラー・カッサパ（Uruwaira Kassapha）、ナディ・カッサパ（Nadi Kassapha）、ガヤ・カッサパ（Gaya Kassapha）の三人です。彼らは兄弟で、それぞれ五百人、三百人、二百人の弟子を引きつれていました。

ブッダがウルヴェーラーに着いたときには、夕方遅くなっていました。そこで長兄のウルヴェーラー・カッサパのところに行き、聖火堂で一夜泊まらせてもらえないかとたのみました。

「かまわないが、聖火堂には猛毒の毒竜がすんでいるから、毒竜があなたに害を加えなければよいが。」

カッサパは二度三度、念を押して注意をしました。ブッダはそのことは承知の上でした。そこで、カッサパはやむを得ず許可しました。

ブッダは聖火堂に入って草の敷きものをひろげ、足を組んで座り、背筋をのばして瞑想を始めました。すると毒竜は、すぐブッダに気づき怒り、攻撃を仕掛け殺そうとしました。毒竜は激しい攻撃を再三再四繰り返し、聖火堂はまるで煙火につつまれ燃え上がったようになりました。

翌朝、カッサパはブッダが死んだと思い、弟子を引きつれて聖火堂に行き、中をみてびっくりしました。そこにはブッダが静かに座っていたのです。ブッダは彼らに鉢の中を見せました。中には、おとなしくなった小さな蛇がいました。彼はブッダの法力に感心しましたが、自分が最も偉大なバラモンとうぬぼれていましたので、自分にかなうはずがないとあくまで信じていました。

そこでブッダは、種々の超自然的な神変を何度もあらわしました。さすがにカッサパは、ついにブッダに絶対かなわないと認めざるを得なくなりました。老カッサパは、ブッダに教えを請い、帰依したい気持ちになったのです。

「五百人の修行者をひきいている指導者としては、簡単に決断してはいけない。彼らに自分たちの道をえらばせなさい。」

弟子たちは老師カッサパに従って、ともにブッダに帰依することを願いました。このようにして、一同は頭髪をそり、頭のかざりや身の回りのもの、祭火の道具などすべて川に流しました。

次兄のナディ・カッサパは、川上から髪の毛や祭式の道具などが次々に流れて来るのをみました。兄に何かあったのではないかと案じ、三百人の弟子たちを連れ兄のもとに駆けつけ、訳を聞きました。末弟のガヤ・カッサパも同様でした。かくして、火を崇める結髪の行者千人がブッダに帰依することになりました。ブッダの集団が、宗教団体として大きく発展するもととなったのです。

18　ビンビサーラ王との再会立

ブッダはしばらくウルヴェーラーにとどまった後、新しい千人の修行者とともに、ガヤ―シーサ(Gayasisa)山に向いました。ここでブッダは、彼らに人間の苦悩を火にたとえた【燃える火の教え】を説きました。千人は火を燃やして火神に仕え、祭っていた人たちです。この教えを説いているうちに、修行者たちは執着心が消え、もろもろの煩脳から解き放されました。彼らはさとりの最上位の境地に至ったのです。

やがてブッダは、千人の弟子たちをしたがえてマガダ国の首都ラージャガハに行き、郊外のラッティバナ(Latthivana)に滞在しました。ブッダがさとりを開いたのち、この都市を最初に訪れたのは、ビンビサーラ王との約束をはたすためでした。ビンビサーラ王はブッダが当地に来ているのを知り、多くの臣下をつれてブッダに会いに行きました。彼はブッダに親しくあいさつのことばを交わし、片すみに座りました。

臣下たちは、ある者はブッダにあいさつして座り、ある者は合掌して座り、ある者は自分の名前をなのってから座り、ある者はだまって座りました。彼ら臣下は、すでにブッダの評判をきいていましたが、〔この若い僧は、著名なウルヴェーラー・カッサパに師事しているのであろうか。それとも、カッサパの方が弟子になっているのであろうか〕と、疑問におもっていました。

彼らの疑問を察したブッダは、カッサパと問答することによって、どうしてカッサパが自分の弟子になったのかを語らせようとしました。結果、カッサパは立ち上がって、衣の右肩の部分を脱ぎ、ブッダの足にひれ伏しました。

「この方はわたしの師です。わたしは弟子であります。」

カッサパはくり返し述べました。マガダ国にひろく知られた、誇りたかく自負心のつよいカッサパのことばに、一同はその事実を知ることができました。こうして、ブッダはビンビサーラ王をはじめ、臣下など多くの者たちに法を説きました。彼らはその法話を聞いて、よごれなき真理をみる眼が生じました。

ビンビサーラ王は、かつてブッダが修行者としてはこの地を訪れたとき、彼と会見し、目覚めた人・ブッダになられたら、まず自分を導いて欲しいと約束していました。それがかない、王は大いに喜びました。そして、明日の食事の約束をし、ブッダをはじめ千人の弟子たちを招待しました。

翌朝になると、ラージャガハの住民たちが一目でもブッダにお目にかかりたいと集まって、いたる道路は人がいっぱいでした。ブッダは弟子たちと王宮におもむき、用意された座に座りました。王はかたい、またやわらかいごちそうを手ずから給仕して、一同を満足させました。ブッダが食べおわり、鉢と手をあらったときに、王は街から遠すぎず、近すぎず、行きやすく、昼も夜も静かで、瞑想しやすい場所を提供すると申し入れました。

（筆者は当協会専務理事：都築治）

イラスト：とみざわ えりこ

F&P フクダ・アンド・パートナーズ
ONE MORE TRY! CO-SOURCING REAL PARTNER

KOJIMA 株式会社小島組

M3L Myanmar 3L Co., Ltd

中央土木株式会社

ミヨシグループ
MIYOSHI GROUP & CO.,LTD.

米粉製粉設備のことなら
西村機械製作所
NISHIMURA MACHINE WORKS CO.,LTD.

WING 価値ある未来を応援する企業
株式会社ウイング

株式会社　ブヨウ

・お地蔵さんの寺
・壬生狂言
・新選組ゆかりの寺
壬生寺

日本の技術と心を世界へ
Yamakaji 株式会社山梶製作所

選ばれる人材をサポートします
KTK 勝喜株式会社

世界遺産登録
高野山 藤之坊　成福院
ビルマ方面 戦没英霊供養
摩尼宝塔

編集後記

“ヤダナー”
ရတနာ
[yadana]

今号から編集を担当致します新美です。

私がミャンマーと係るようになったのは、1979年に家の近くでシャンバックを持ったビルマからのJICA研修生に父親が声をかけたのが始まりでした。

父親はインパール作戦の最中、兵站活動の一環としてマンダレー郊外の精米所を一人で管理し前線へ米の補給を行っていた経緯から、マンダレー地方の言葉に通じており、彼等と比較的スムースにコミュニケーションをとる事ができました。

毎年近所のレンガ工場に研修生としてやってくるビルマ人達は、その後、我家を訪れることとなり、私達とのプライベートな交流が長く続く事となりました。

1972年3月、「日本ビルマ文化協会」の創立総会が京都にて華々しく開催され、また、同年5月には記念すべき「協会報創刊号」が発行されました。

父親は1982年頃に、私は1987年頃に同協会へ入会し、東海地区でビルマの方々と地道な交流活動を続けて参りました。

協会名も時代の変遷と共に名称変更がなされ、現在は「一般社団法人日本ミャンマー友好協会」として、全国展開を図っております。

ビルマからミャンマーへと国名も一新され、民主的な機運が高まっていた矢先、コロナの流行や国軍によるクーデターの発生により、一挙に不透明な世情へと転換を余儀なくされました。

しかしこうした状況下においも、当協会としてはしっかりと前を見据え、日緬両国に有意義な活動を実施してまいります。今号では「日緬青年交流バスツアー」、「壬生寺体験ツアー」、「ミャンマー留学生育成110年記念講演会」など、また、新規事業として、「日本ミャンマー交流基金」や「坂口奨学金制度」などを提案させていただきました。

ネット社会の現在、「重みや手触り、紙の匂いなど五感を刺激しながら読み進めるため無意識の内に五感と共に情報が記憶される」という紙媒体ならではの良さを、この会報を通じ十分ご堪能いただければ幸いです。

編集：新美　鉄雄

【関西支部】〒530-0001 大阪府大阪市北区梅田1丁目1-3大阪駅前第3ビル20F　TEL.06-6342-1788
【三重支部】〒515-1411 三重県松阪市飯南町粥見2318-3中央土木(株)本社内　TEL.0598-32-8800
【ミャンマー支部】No.37(1F), 164th Street, Tamwe Township, Yangon, Myanmar　TEL.(+95) 9-505-1823